

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：34202

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25750018

研究課題名(和文)小学生の生活力を高めるにあたって学童保育指導員に求められる専門性に関する研究

研究課題名(英文) Study on Specialty required of After School Care Workers to improve Life Skills of Elementary School Children

研究代表者

松本 歩子 (MATSUMOTO, AYUKO)

平安女学院大学・子ども教育学部・講師

研究者番号：10615058

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：若者の生活力低下が叫ばれる今日(1)学童保育ではどのような生活体験が可能か(2)学童保育での生活体験が子どもの生活力にどう影響を与えるかを、学童保育における観察調査、指導員へのヒアリング調査・質問紙調査、卒所生へのwebアンケート調査等から把握した。事例より学童保育には、生活体験の機会が多数存在し、子どもたちの生活力を高めていることが確認された。しかし全国的にみると、生活体験の機会を設けている学童保育は少数であり、子どもたちを生活の計画や内容作りに参画させていない学童保育も存在した。指導員が子どもたちを主体的な生活者として捉える視点を養うことが今後求められる。

研究成果の概要(英文)：[Object] To clarify what kind of life experiences are possible in after school care as well as what kind of influences are given to children's life skills through the life experiences in after school care [Methods] Observation survey in after school care, hearing survey and questionnaire-paper survey to after school care workers, and web-questionnaire survey to the graduates of after school care [Results] From the cases, it has been confirmed that in after school care there are many opportunities for experiencing life and that children's life skills get improved. However, when looking nationwide, after school care facilities providing opportunities for life experiences are few, and there also exist after school care facilities which do not allow children to participate in their life planning and in making of the contents of experiences. [Discussion] From now on, workers are required to foster the viewpoint to regard children as independent citizens.

研究分野：生活科学

キーワード：学童保育 放課後児童クラブ 生活体験 生活力 学童保育指導員 小学生

1. 研究開始当初の背景

(1) 女性の社会進出や核家族化の進行に伴い今後、留守家庭児童が過半数を占める新たな時代が訪れる中、「学校」でも「家庭」でもない「学童保育」の時間に、子どもたちへ豊かな生活を提供することの重要性は高まっていると言える。

(2) 特に、若者の生活力低下が叫ばれる今日、学童保育には豊かな生活体験（家事労働や他人との付き合い）を行う場を提供し、子どもたちの生活力の向上に寄与することが望まれる。

2. 研究の目的

(1) 学童保育において子どもたちはどのような生活体験を行うことが可能かを明らかにする。

(2) 学童保育における生活体験が子どもの生活力にどのような影響を与えているかを明らかにする。

(3) 学童保育指導員に向け、「生活体験の場の保障」を専門性の1つと捉えた、研修教材の検討・作成を行う。

3. 研究の方法

(1) 学童保育における生活体験に関する調査

放課後の遊びと生活の場である学童保育において、子どもたちがどのような生活体験ができるかを把握するため、1～6年生までの児童を対象とし、運営主体等が異なる6地域の学童保育所（表1）において指導員に対するヒアリング調査及び観察調査を行った。

なお、子どもたちがどのような生活体験を行っているかを整理し把握するため、「平日（普段）の生活」、「土曜・長期休業時の生活」、「行事での取組」という3つの観点から調査を行った。

表1. 調査地一覧

運営形態	調査地	調査時期
運営委員会	岡山県倉敷市	2014年2月
	岡山県瀬戸内市	2014年2月 2017年8月
NPO	大阪府熊取町	2014年2月
父母会	愛知県名古屋市	2014年9月
	大阪府大阪市	2017年12月
一般社団	岡山県岡山市	2017年9月

(2) 学童保育における生活体験が子どもの生活力に与える影響に関する調査

学童保育における生活行為として、ほとんどの施設で位置づけられている「おやつ時間」に注目し、大阪市の学童保育8カ所（A～H施設）の主任指導員へおやつの実態に関するアンケートと簡易インタビュー、D施設の主任指導員への半構造化インタビュー、D

施設での参与観察、卒所生12名（10代が1名、20代が9名、30代が2名）へのWebアンケートを実施した。

(3) - 1 学童保育指導員の専門性と認定資格研修の現状と課題に関する調査

2015年度より「放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準」「放課後児童クラブ運営指針」の策定により学童保育（放課後児童クラブ）の制度が大きく変更した。特に指導員については設置基準や準国家資格ともいわれる認定資格研修制度が位置づけられることになった。よって、「学童保育指導員に求められる専門性」を検討するため、2016年3月に「放課後児童支援員認定資格研修」の実態と課題に関するアンケートを配布し、認定資格研修受講生10名及び研修担当講師36名から得られた回答を分析した。また、認定資格研修の内容がどの程度理解され、その後現場で活かされているかを把握するため、2018年1月に全国各地における2015年度と2016年度を中心とした受講者1340人（大阪200人、埼玉200人、石川100人、和歌山100人、京都70人、三重100人、滋賀100人、愛知220人、専門性研究大会参加者250人）を対象に配布、回収した。回収数は466部、回収率は34.8%であった。

(3) - 2 学童保育指導員の学童保育での生活に対する意識に関する調査

学童保育指導員は「学童保育での子どもたちの生活」をどのようにとらえているかを把握するため、2015年の2月、3月に異なる市町村の学童保育で勤務する指導員歴6～19年の指導員4名（中堅指導員グループ）と、指導員歴25～32年の指導員5名（ベテラン指導員グループ）を対象にそれぞれグループヒアリングを実施した。その後、ヒアリングによって得られた内容をもとに、学童保育の生活実態と学童保育指導員の生活に対する意識に関する調査票を作成し、全国からランダムに選定した2000施設の放課後児童クラブを対象に各施設最大3名の学童保育指導員へ質問紙調査を実施した。回収数（回収率）は550施設（27.5%）、1383人であった。

4. 研究成果

(1) 学童保育における生活体験

学童保育においてどのような生活体験ができるかに関して、現行の小学校「家庭」学習指導要領の内容の枠組みを用いて、分類した（表2、表3、表4）。

①「平日（普段）の生活」：学童に来ると過ごしやすいうる服を着替えたり、おやつの時間には、役割分担を決めおやつを配膳したり、テーブルを拭いたり異年齢の児童が協力して準備をすること、一緒に食事を楽しむこと、片づけも自分たちで行うことが習慣とされていた。また、自分が遊んだ道具は自ら片づけること、自分たちの居場所を快適に保て

るよう意識している様子が伺えた。

表2 平日の生活体験活動

小学校学習指導要領の項目	学童保育の平日生活例				
	着替え	おやつ	遊び・勉強・休息	掃除	帰りの会
A	自分の成長と家族		遊び・勉強・休息	掃除	帰りの会
	家庭生活と仕事	役割分担	取組中の達成感	役割分担	自己の成長 仲間との大切さ
	家族や近隣の人々との かかわり	団楽	仲間との 触れ合い		翌日の計画
	食事の役割	大切に気づく マナー			
	栄養を考えた食事	組み合わせて			
B	調理の基礎	配膳・後片付け 衛生的取り扱い			
C	衣服の着用と手入れ	快適な着 方の工夫			
	快適な住まい方		整理 整頓 季節 にあった快適性	掃除の仕方 の工夫	
	生活に役立つ物の製作		工作		
D	物や金銭の使い方と買物 環境に配慮した生活の工夫			ゴミの分別	

②「土曜・長期休業時の生活」：指導員が朝の会などにおいて、子どもたちの意見を尊重しながら一緒に1日の生活時間を組み立て、勉強や休息の時間をうまく組み合わせて生活できるよう促している様子や、食事やおやつを調理する活動を行っている様子などが把握された。

表3 土曜・長期休業の生活体験活動

小学校学習指導要領の項目	長期休暇（午前中）生活例			
	朝の会	遊び・勉強・休息	昼食	午睡
A	自分の成長と家族	遊び・勉強・休息	昼食	午睡
	家庭生活と仕事	取組中の達成感		
	家族や近隣の人々との かかわり	1日の計画	役割分担	
	食事の役割	仲間との 触れ合い	団楽	
	栄養を考えた食事		大切に気づく マナー	
B	調理の基礎		組み合わせて 献立づくり	
	調理の基礎		材料の分量や手順、 材料の洗い方・切り 方・味付け・盛り付け、 配膳・後片付け、 衛生的取り扱い	
C	衣服の着用と手入れ			快適な着 方の工夫
	快適な住まい方		整理 整頓 季節にあった快 適性	季節にあっ た快適性
	生活に役立つ物の製作		工作	
D	物や金銭の使い方と買物 環境に配慮した生活の工夫			ゴミの分別

③「行事での取組」：キャンプを企画し、キャンプ生活の仕事を担当したり、指導員の先生や保護者とともに地域のバザーを企画・運営したり、地域のゴミ拾い、空き缶収集を行っている活動なども見られた。父母会運営の事例では、お小遣いを渡し、定期的に学童保育内にお店屋さんを出し、買い物ごっこを楽しみながら、小遣い帳をつけるような消費活動もみられた。

表4 行事取り組みでの生活体験活動

小学校学習指導要領の項目	行事取り組み例				
	入所卒所式・誕生会	キャンプ	地域バザー	地域清掃	お店屋さんごっこ
A	自分の成長と家族	自分の成長 仲間との大切さ	自分の成長 仲間との大切さ	自分の成長 仲間との大切さ	自分の成長 仲間との大切さ
	家庭生活と仕事	役割分担	役割分担	役割分担	役割分担
	家族や近隣の人々との かかわり	仲間との 触れ合い	家族や地域の人との関わり	仲間との触れ 合い	仲間との触れ 合い
	食事の役割	大切に気づく マナー			
	栄養を考えた食事	組み合わせて 献立づくり			
B	調理の基礎		材料の分量や手順、 材料の洗い方・切り 方・味付け・盛り付け、 配膳・後片付け、 衛生的取り扱い		
C	衣服の着用と手入れ				
	快適な住まい方		整理 整頓 季節にあった快 適性	掃除の仕方 の工夫	
	生活に役立つ物の製作		物品製作		
D	物や金銭の使い方と買物 環境に配慮した生活の工夫		販売	小遣い帳・ 購入計画	

(2) 学童保育のおやつ役割と生活力

①おやつ提供実態と指導員の意識

指導員は季節感に合わせた食材を提供したり、挨拶や食事の姿勢、片付けなどの食事のマナーを伝えるなど「教育面」からアプローチするとともに、子どもたちがメニューを選んだり、買い出しに行ったり、手作りしたりするなど「主体的」におやつに関わることができる機会を設けていた。またおやつ時間が、子どもたちにとって楽しく、みんなが揃うコミュニケーションの場になるよう意識し、内容や、開始時間を調整していることが把握された。

ただし、脱ゆとりにとまなう学校の長時間化や宿題量の増加が進む中で、子どもたちに遊びに熱中できるまとまった時間を保障し、かつ家庭での夕食に影響を与えない時間にみんなが揃うおやつ時間を設定することが困難になってきているという課題も聞かれた。

②おやつ時の子どもたちの様子

自由時間には思い思い別々の遊びをしていた子どもたちも、おやつ時には同じテーブルを囲み、おやつについて共通の話題を通して、異年齢集団で会話する姿がみられた。おやつを選ぶことができたり、調理・味付けをできるなど、おやつに対して子どもたちが主体的に関与できる機会が多いほど、集団での会話も弾みコミュニケーションの場が生まれることが考察された。

ただし、一方で学童保育では子どもたち一人ひとりが自分の気持ちや意見を表現することが権利として保障され、無理なく参加できるようにすることが必要であることから、おやつ時間を決めて全員が揃って食べることをルール化するのではなく、「今の遊びを切りのいいところまで続けたい」など個々の子どもたちの思いにも心を寄せ、柔軟な対応をとることが望ましい。

③おやつに対する卒所生の評価について

学童保育でのおやつ時間の記憶については、卒所してから10年以上経過している者が大半にもかかわらず、とても記憶に残っているが6名、ある程度記憶に残っているが5名で計11名(92%)から記憶に残っているという回答が得られた。そのうえで、おやつ時間を必要だと認識し、特に「仲間と会話



図1 おやつ必要性を判断した理由

が弾む時間だから」、「調理や片付けなど生活力が身に付くから」という点を評価していた。一方おやつを「食事とともに必要な栄養摂取の機会」と評価しているものはいなかった

(図1)。今回、調査対象者がOB・OG会の会員に限定され、対象年齢層の卒所生のうち、約半数のみを対象としていることや、回答率が5割程度であることから結果には多くのバイアスがかかっているといえる。しかし、人間関係の希薄化が課題となる今日において、OB・OG会というつながりを今も持ち続けている者たちからのこれら意見には、大きな説得力があるともいえるのではないだろうか。

④生活体験が生活力に与える影響

学童保育での生活体験の1つであるおやつは、食事で不足する栄養素を補うだけでなく、集団生活の中でのコミュニケーションのツールとしてや生活技能を身に付ける機会として大きく位置づいていることや、子どもたちが、主体的な生活を送る機会となっていることが指導員及び子どもの実態・意識から把握された。

(3) - 1 学童保育指導員の専門性と認定資格研修の現状と課題

①認定資格研修の問題点

受講者及び研修担当講師から、講師の選定方法や研修環境、評価方法についての課題・問題点が指摘された。

②認定資格研修の理解度

科目9「子どもの遊びの理解と支援」では“理解できた”が50.4%で最も高く、“やや理解できた”と合わせた「理解できた群」が89.0%であった。一方、「放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の理解」に関わる科目1,2,3と、科目14「安全対策、緊急時対応」、科目16「放課後児童クラブの運営管理と運営主体の法令の遵守」においては、「理解できた群」が70%に満たず、他の科目よりも低かった。

③認定資格研修の役立ち度

“役立っている”と“やや役立っている”を合わせた「役立っている群」の割合は科目5の「児童期（6歳～12歳）の生活と発達」が89.7%で最も高科目4「子どもの発達理解」が89.4%、科目9「子どもの遊びの理解と支援」と86.9%と続いた。一方、「放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の理解」に関わる科目1,2,3と、科目16「放課後児童クラブの運営管理と運営主体の法令の遵守」は「役立っている群」が70%に満たず、他科目よりも低かった。

④認定資格研修後の変化

「変化あり群」の割合が最も高かったのが、「19. 放課後児童支援員には独自の専門性が必要だと感じた」で86.7%であり、次いで、「18. 放課後児童支援員としての責任感が増した」の83.6%であった。また「特に配慮を要する子へ意識して関わる機会が増えた」「遊びの大切さを理解し、主体性、創造性を

大切にしよう意識する機会が増えた」も変化あり群が約80%であった。一方、「変化なし群」の割合が最も高かったのが、「2. 関連する子ども家庭福祉施策と連携・協力する機会ができた、増えた」16.3%であり、次いで「12. 学校や地域との連携の機会ができた、増えた」10.7%、「11. 家庭での子育てを支援する機会ができた、増えた」が9.6%であった。

⑤認定資格研修の意義

認定資格研修受講者は、受講から数年後においても、現場で一定の役立ち感を感じており、いくつものプラスの変化が生まれている。また受講者は責任感や、独自の専門性への認識も高まっている。これまで専門の資格が存在しなかった学童保育指導員に固有の資格が誕生し、専門性が確立され、質の均一化が図られるという点で現場の期待も大きい。

「生活体験の機会提供」についても、放課後児童クラブにおける育成支援の内容において、「日常的な生活習慣を習得できるようにする」「発達段階に応じた主体的な遊びや生活ができるようにする」ということは明記されているものの、専門性の中に位置づけられていないことは今後の課題である。

(3) - 2 学童保育での生活に対する指導員の意識と生活実態

①指導員の「生活とは何か？」における語り

両グループから共通して、「安心できる雰囲気となるように心がけている」「学童保育の生活は子どもたちのその日の雰囲気によって予定を見直すこともよくあるもの。」という意見が出された。

中堅指導員グループからは、「指導員は権威的になる～先生ではなくあだ名で呼ばせている。」「生活技能を身につけられる場になっている」「下校時間が遅い日の方が、放課後の生活に時間が無くトラブルが多い」という意見が聞かれた。

ベテラン指導員グループからは、「子どもたちが安心して、喜怒哀楽など素の自分が出せる場となるよう意識している」「子どもたちが自分が選んだり、決めたことを安心してできるように、主体的に過ごせる場にしていくのが指導員の仕事」「子ども同士がケンカもしながら心と心で互いに関係を結んでいくところ。」という意見が聞かれた。

②学童保育における生活技能の習得

自立した生活を目指すうえで、必要となってくる生活技能を日本家庭科教育学会の「家庭生活についての全国調査」の項目をもとにして、学童保育における実態を尋ねたところ、図2のとおり、「部屋を掃除してきれいにする」「近所の人に挨拶をする」「幼い子どもの相手をする」「ごみを決められた方法で出す」は「する」「ときどきする」を含めた「する群」が50%を超えたが、10項目では「(全く)しない」という回答が5割を超えた。

事前の事例調査からは、衣服の洗濯や修理の項目以外はいずれの調査地でも実践され

ていることが確認されていたが、全国的に見ると少数であることが把握された。

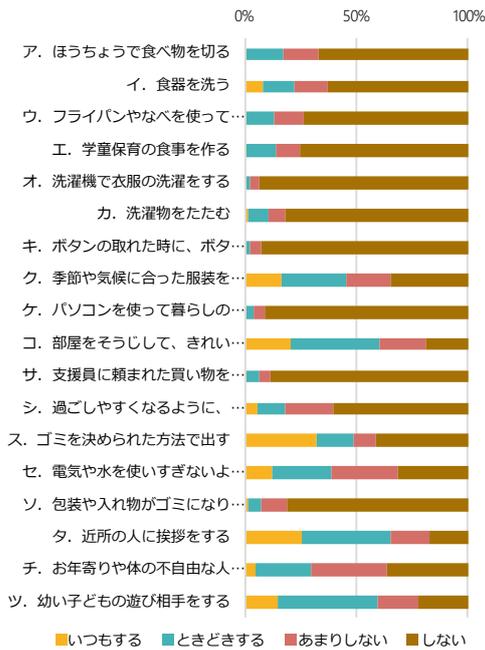


図2 学童保育での生活技能習得の機会

③学童保育の生活への子どもの参画

放課後児童クラブ運営指針では「子どもが安心して過ごせる生活の場として ふさわしい環境を整え、安全面に配慮しながら子どもが自ら危険を回避できるようにしていくとともに、子どもの発達段階に応じた主体的な遊びや生活が可能となるように、自主性、社会性及び創造性の向上、基本的な生活習慣の確立等により、子どもの健全な育成を図ること」が育成支援の基本として明文化された。しかし、図3の通り、「子どもを生活の計画や内容作りに参画させているか」について、「子どもを生活の計画や内容作りに参画させている」は65.2%であるなど、参画させていない学童保育も存在した。

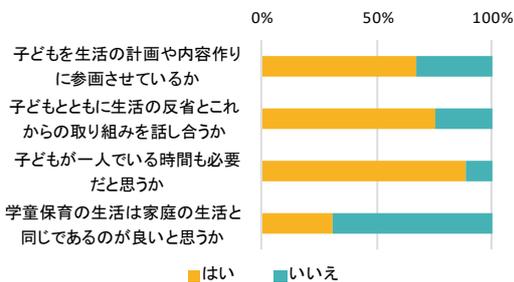


図3 子どもの参画などの実態

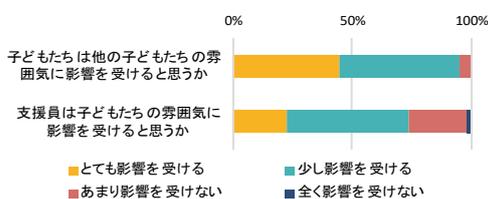


図4 雰囲気の影響

④雰囲気の影響

子どもの雰囲気は他の子どもに影響しやすく、73.1%の支援員は自身も子どもの雰囲気に影響されることがあると感じていた。

⑤子どもの主体的な生活を支える指導員の専門性

子どもたちの豊かな放課後を保障する上で運営指針において学童保育では子どもたちが「主体的に」過ごせるよう支援することが位置づけられた意味は大きい。調査結果より、日々子どもたちの雰囲気に合わせて、生活を、構成していくことが求められる支援員にはマニュアル化できない柔軟な思考がも求められる。社会においても、この独自の専門性に対する認識が高まることが期待される。また子どもたちが主体的な生活者となる上では、「生活技能の習得」に挙げられるような活動を、学童保育の生活に当たり前にちりばめる視点も必要ではないだろうか

(4) まとめ及び考察

事例調査から、学童保育には生活体験の機会が多数存在し、子どもたちの生活力を高めていることが確認された。

しかし全国的にみると、生活体験の機会を設けている学童保育は少数であり、子どもたちを生活の計画や内容作りに参画させていない学童保育も存在した。学童保育指導員が「生活技能の習得」に挙げられるような活動を、学童保育の生活に当たり前にちりばめ、子どもたちを主体的な生活者として捉える視点を養うことが今後、求められるだろう。

現在の認定資格研修においては、子どもたちが「主体的に」過ごせる環境が必要だという理念的なことは理解されても、子どもたちを主体的な生活者として捉え、「生活体験の場」を保障するという実践にまでは結びつきにくい状況である。今後、図2～4で示したような教材を用いて、各場面における様々な生活体験の事例紹介を各地の学童保育指導員に行うことで、これまで全くされなかった学童保育においても広く実践が取り入れられていくのではないだろうか。

ただし、事例調査において、我が国が「脱ゆとり、『学力』重視」に舵がきられたことによる小学校の授業時間数増加にともない、下校時間が遅くなり、放課後の時間が短くなったこと。そしてその影響でまとまった遊びの時間の確保を優先すると生活体験の場を保障することがなかなか難しくなってきたという意見も聞かれた。子どもたちに豊かな生活を保障し、生活力向上につながる環境を保障する上では、「学校」「放課後」「家庭」の3者のあり方が再検討されるべき時が来ているように思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

①嵯峨美咲、松本歩子、花輪由樹、学童保育の生活におけるおやつの役割に関する研究、

平安女学院大学紀要、査読無、第2巻、2018年、p. 19-29、DOI:なし

②松本歩子、学童保育から家庭科教育を考える、家庭科研究、査読無、第342巻、2018年、p. 36-39、DOI:なし

〔学会発表〕(計 6件)

①松本歩子、学童保育における生活実態を踏まえた小学校家庭科学習指導計画のあり方に関する研究、日本家庭科教育学会、2014年、6月29日、岡山大学

②松本歩子、保育士養成校における学齡児保育科目開講の現状と課題、日本保育学会、2014年5月18日、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学

③松本歩子、高学年児童の放課後生活に関する実態調査－留守家庭児童の生活拠点についての考察－日本家政学会、2015年5月24日、いわて県民情報交流センターアイーナ

④松本歩子、放課後児童支援員研修の課題と展望、日本学童保育学会(招待講演)、2016年6月19日、日本福祉大学

⑤松本歩子、垣内國光、植木信一、石原剛志、住野好久、前田美子、奥野隆一、二宮衆一、放課後児童支援員認定資格研修が現場にもたらす効果と課題－受講者アンケートからの分析－、日本学童保育学会、2018年6月24日、明星大学

⑥松本歩子、奥野隆一、石橋潔、竹中真美、前田美子、放課後児童クラブ(学童保育)の生活実態と支援員の意識に関する調査、日本学童保育学会、2018年6月24日、明星大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 歩子 (AYUKO MATSUMOTO)

平安女学院大学・子ども教育学部・講師

研究者番号：10615058